

石狩浜漂着の魚叩き棒は誰のものか？

—北海道魚叩き棒の系譜を考える—

The fish bonker drifted ashore on the Ishikari beach

—Genealogy of fish bonker in Hokkaido—

石橋 孝夫*

Takao ISHIBASHI*

要 旨

石狩浜に漂着した棒状木製品は、調査の結果、魚叩き棒と考えられた。使用されていた場所は石狩川河口域。年代は近世末から昭和30（1955）年までと推定される。石狩市内では実際使用された魚叩き棒は残っておらず、漂着した魚叩き棒は希少な資料である。また昭和初期のサケ漁の絵葉書に魚叩き棒とみられる棒を持つ漁夫の姿が写っているのが確認された。博物館等のアイヌの魚叩き棒及び遺跡出土の魚叩き棒の調査では、「棒状」と「バット状」の2種類あることが確認できた。遺跡出土の魚叩き棒と推定されている木製品は型式的にまとまりがなく、すべてが魚叩き棒ではない可能性がある。北見市常呂川河口遺跡出土の資料の中に「バット状」で削り掛け（キケ）が付けられていた痕跡をもつ魚叩き棒が確認された。

キーワード：魚叩き棒、イサパキッニ、サケ・マス漁

はじめに

2017年5月15日午前、石狩浜のビーチコーミング中、石狩川左岸河口近くの波打ち際で野球のバットのようにグリップエンドをもつ棒が、漂着しているのを見つけ採取した。

採集した理由は、棒が、遺跡出土やアイヌ民族がサケ・マス漁に用いた魚叩き棒に形が似ており、魚叩き棒ではないかと思ったからである。

魚叩き棒は木製で、北海道だけでなく本州でも太平洋側は千葉県から青森県、日本海側は新潟県から秋田県のサケ・マス遡上河川で使用されている漁具である（赤松, 1855；安斎, 1987；菅, 1994；1995b；小野寺, 1998）。また国外では樺太（現サハリン）（知里, 1944a）、北米西海岸（菅, 1995a）でも使用されていた。この漁具は捕獲したサケ・マスの頭部付近を叩いて絶命させるために用いられる。国内では「魚叩き棒」「鮭叩

き棒」「たたき棒」「イサパキッニ」などの名称がある。

使用対象は主にサケ・マスであるが、『コタン生物記Ⅱ』（更科・更科, 1979）に「オビラメ」（イトウ・サケ科）を叩いている写真があり、サケ・マス以外の魚種にも使用される場合もあったとみられる。

漂着した棒の周囲には多数の風化した流木がみられた。また、保存処理が必要なほど劣化が進んでおり、おそらくこの資料は河川内に埋もれていたが雪解け水で流出し、海岸に漂着したと推定される。いうまでもなく石狩川は北海道有数のサケ・マス遡上河川である。流域には、縄文時代からサケ・マス漁が行われていたことを示す石狩紅葉山49号遺跡があり、当時の漁労施設や魚叩き棒と推定される木製品も出土している（石狩市教育委員会, 2003；2005；石橋, 2005）。

また、石狩川河口部では、安政5（1858）年の

* いしかり砂丘の風資料館（学芸協力員） 〒061-3372 北海道石狩市弁天町30-4

石狩改革にともない石狩アイヌの鮭漁場が7カ所設けられた。さらに明治13（1870）年以降は河口から江別市対雁の間に樺太アイヌの漁場も設けられた。そして明治30（1897）年代まで石狩アイヌ、樺太アイヌの漁場が続いた。その後、地元漁民による漁が昭和30（1955）年まで続けられた（田中, 2002b）。

このような点から、漂着した棒は石狩川のサケ・マス漁の歴史と密接に関係する可能性がある。筆者は2017年6月から12月まで漂着した棒が魚叩き棒かどうかなどを知るための調査をおこない、本稿はそのまとめである。

1. 漂着した木製品、現代の魚叩き棒の例、石狩川河口の魚叩き棒

1-1. 漂着した木製品

木製品は、石狩川左岸河口まで約50mの石狩浜の波打ち際で発見された（図1、2）。

大きさは長さ460mm、先端部径35mm、末端部径30mmで樹種はヤナギ属である。少し弓なりの枝又は若木の幹を素材としており、図3の左側（先端）がわずかに太い。

右端から幅35mmは削らずに残し、そこから先端方向に70mmを刃物で削って細くして、柄部を作り出している。柄を削った結果、未加工部分はグリップエンド状となっている。

柄のグリップエンド側の直径方向に幅2mm溝跡がかすかに残っている。これは使用の際、棒が抜け落ちるのを防止する紐を付けるための溝と考

えられる。棒の両端は波によるローリングで摩滅して丸みを帯びているが、柄以外は成形された痕跡がない。このことから、敲打部は樹皮を残してあった可能性が高い。また、反りとは反対面（図3の上面側）に先端から50mmの部分に幅30mm×長さ75mmの範囲に敲打痕（使用痕）が集中しており、この部分を中心に作業をしたものと考え



図1. 漂着物採取地点（x）。



図2. 漂着状況。中央の棒が漂着物。



図3. 採取された木製品（保存処理前、左側が先端で右が柄）。

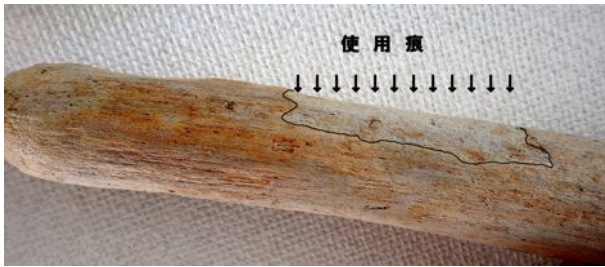


図4. ↓が使用痕.

られる(図4)。

以上述べた観察所見と以下に述べる調査結果を踏まえると「魚叩き棒」の可能性が高い。

1-2. 現代の魚叩き棒

筆者はかつて、サケ・マス孵化施設で魚を棒で叩き絶命させていると聞いたことがあった。そこで北海道内のサケ・マス増殖施設に問い合わせみたところ、2カ所から回答があり、採卵の際、サケ・マスを叩く棒を使用していることを確認できた。名称は「たたき棒」あるいは「撲殺棒」たんに「棒」呼んでいるという。サケ・マスを叩くのが目的であるので「魚叩き棒」といえる。

この棒は明治21(1888)年に始まった北海道のサケ・マス孵化事業始業時から使用されてきたとみられる。棒の使用目的はすでに述べたように採卵の際、親魚が暴れないように叩いて絶命させるために用いる。今では機械もあるそうだが、これが一番使いやすく最良の道具であるという。

(一社)胆振管内さけ・マス増殖事業協会では、樹種は「クワ」か「ヤチダモ」で、長さ40cm、最大径7~8cmのものが多く、滑って手から離れると危険なので樹皮は除去し、脱落防止用の紐を必ず付けるという。

筆者は千歳市の(一社)日本海さけ・マス増殖事業協会のご好意で実際に棒を使うようすを見学できた。この協会の撲殺棒は「マツ」の丸木あるいは「ラワン」の角材が使われていた。原木の形で敲打部の形状は「丸」と「四角」があるが、グリップエンドがあり「バットのよう形」をしている(図6, 7)。長さには決まりはなく、作業にあたる人が各々使いやすいように工夫し加

工しているという。叩く部位は、目と鼻の間が絶好の位置だといい、そこに当てると「パーン」という独特な音をする(図5)。ここで調査した撲殺棒は寄贈品(図8)を含め8点で、データは表1に示した。

図8は千歳市にある日本海さけ・マス増殖協会から筆者に寄贈された撲殺棒である。5年間ほど使用され、廃棄されたものである。長さ405mm、先端部(図の右側)径45mm、末端部径40mm、



図5. 作業風景(手前の人が撲殺棒を持って叩く)。



図6. 現在使用している撲殺棒.



図7. 表1-N5の撲殺棒(ラワンの角材)。



図8. 日本海さけ・マス増殖事業協会寄贈の撲殺棒.

表 1. 現代の魚叩き棒などの計測値.

施設名	番号	名称	全長 (mm)	先端径 (mm)	末端径 (mm)	樹皮	形状	材質	木取り	備考
いしかり 砂丘の風資料館	No.1	サーモンメタルバット	430	50	45		バット状	アルミ		2016年購入 サケ釣り用品
	No.2	FISHBONKER	420	60	35	無		?	割り材?	2007年寄贈品 カナダ土産
日本海さけ・ます 増殖事業協会寄贈		撲殺棒	405	45	40	無	バット状	マツ?	丸木	2017年寄贈品 (2012~2016使用)
漂着した木製品		魚叩き棒	460	35	30	?	バット状	ヤナギ属	丸木	2017年5月 石狩河口漂着物
日本海さけ・ます 増殖事業協会使用	N1	撲殺棒	400	75	65	無	バット状		丸木	製作年不明~ 2017年現在使用
	N2	撲殺棒	415	60	55	無	バット状	マツ?	丸木	製作年不明~ 2017年現在使用
	N3	撲殺棒	390	40	35	無	バット状	マツ?	丸木	製作年不明~ 2017年現在使用
	N4	撲殺棒	445	45	35	無	バット状	マツ?	角材	製作年不明~ 2017年現在使用
	N5	撲殺棒	430	43	40	無	バット状	ラワン	角材	製作年不明~ 2017年現在使用
	N6	撲殺棒	390	39	35	無	バット状	ラワン	角材	製作年不明~ 2017年現在使用
	N7	撲殺棒	410	40	35	無	バット状	ラワン	角材	製作年不明~ 2017年現在使用

表中の「FISH BONKER」はカナダ土産の魚叩き棒の模型である.

重さ191 gで樹種はマツ?などの針葉樹とみられる.

この棒で叩いた鮭の数は5万尾以上に上るとい
う. 使用痕は敲打部全体にあり, サケ・マスの歯
があたった痕跡もみられる. 先端部の木質部が剥
がれ落ちており, 膨大な数のサケ・マスを叩いた
ようすが窺える.

かつてのサケ・マス孵化場で使用されていた魚
叩き棒について秋葉鉄之(1957)は次のように述
べている. 「鮭の親魚を撲殺する時には混棒が使
われている. 長さ, 大きさ, 材質等別に基準もな
にもなく, 使い易いものを使っているわけである
が, 藤村信吉氏は長さを7.8寸, 径1寸(鯨尺)と
し, 半日芳男氏は長さ35cm, 径4 cmとした. 一
中略一アイヌの用いたものは, 長さ1尺5寸, 径
1寸としており, 鮭は柳の木を好むから, 柳でつ
くると鮭が成仏するのだという. 『イサパキツ
ニ』或は『イサノミキニツニ』といい, 当场で利

用しているのはこのアイヌのやり方をまねたも
のであろう.」このように秋葉氏は孵化場の棒が
アイヌの魚叩き棒にルーツがあると考えていたよ
うである.

北海道ではもう一種類, 現代の魚叩き棒が存在
する. それは鮭釣りの道具で「サーモンメタル
バット」(商品名)である(図9). その名のと
おり, 釣り上げた鮭を叩くためのバットである.
2015年以前は木製で2016年以降はアルミ製になっ
たという.

写真のものは長さ430mm, 先端部(図右側)
径50mm, 末端径45mmで野球のバットを縮小し
たような形である. 形だけ見ると後述する谷元旦



図9. サーモンメタルバット.

が寛政11年記録した「打魚槌」に類似している(谷, 1799a)。この製品もアイヌの魚叩き棒をモデルとしているという話があるが、確認はできていない。

以上、現在、北海道内で使用されている魚叩き棒について述べた。また、近年ではアイヌ民族の「新しい鮭を迎える儀式」の復活にともない、各地で魚叩き棒が再び使用されるようになってきている。この儀式にともなう魚叩き棒については「3. 博物館等に収蔵されているアイヌの魚叩き棒」項で触れる。

1-3. 石狩川河口の魚叩き棒

すでに述べたように、石狩川河口部(石狩市域から江別市域まで)では昭和30(1995)年まで河川内のサケ・マス漁が許可されており、水揚げの際、暴れる鮭を木の棒で叩いていたという話を筆者も聞いたことがあった。

今回、棒の漂着採取をきっかけに、70歳代の人に鮭を木の棒で叩いていたのかどうか、聞き取りを行った。その結果、子供のころ石狩川右岸(石狩市八幡町地区)の記憶で「確かに石狩川河口右岸の鮭漁場で、水揚げの際、鮭を盛んに叩いていたのを見たことがある。棒の形状については、漂

着したものよりも、さらに太かったような気がする。樹種はアオダモで棒が漁場の壁にずらりと掛けられていた。棒用のアオダモを川岸に植えていた。」などの話を聞くことができた。ただ、別の70歳代の人で「鮭を叩くのにその辺に落ちている手頃な木なら何でも使っていた」と話す人もいた。このことから60年ほど前まで魚叩き棒や木の枝でサケ・マスを叩くことが行われていたことが当時の石狩町内でおこなわれていたことが確認できた。なお使用された棒の名称は明らかではない。

また、石狩市内では次のような資料もあることもわかった。図10, 11は昭和初期の石狩川河口の鮭漁のようすを写した絵葉書(札幌維新堂発行)とその部分拡大である(田中, 2002a)。網を曳く複数の漁夫が写っているが、左から3番目の漁夫の右手に棒を握っている。形状まで確認できないが少し反っているようにみえる。また白っぽくみえる点から樹皮を剥がした木の棒のようである。魚鉤などではないと思われ、魚叩き棒の可能性がある。

このほかにも不鮮明であるが、大正期発行の同様の絵葉書なかにも棒を持った漁夫が写っているものがあり、これも魚叩き棒の可能性がある(田



石狩川口に於ける鮭漁網引きの光景 札幌維新堂絵ハガキ

図10. 札幌維新堂絵ハガキ(田中, 2002a)。



図11. 魚叩き棒を持つ漁夫? 図10の部分拡大。→

中, 2002b) . 今後, さらにこのような資料が無い
か調査を進める必要がある.

次に本州の例で「棒」を使って鮭を叩く漁夫が
描かれている絵図が2例あるので参考までに示して
おく. 図12は赤松宗旦 (1855) の『利根川図誌』
「鱈魚 (鮭) 大網の図 (葛飾北斎画)」の一部で
ある. ここには網を曳く漁夫と, 手に細い長い棒
を持つ漁夫の姿が描かれている. この部分には
「ホ」と「ヘ」の注記があり, 「ホ 網を挽き果
て後或は網中に入り助けてさけをうつ」「ヘ 手
に棒を持ち網子かかりたるさけの頭を打つ」と説
明がつけられている (下線筆者). 「ホ」の意味
は分かりにくい「さけをうつ」とあり, 「ヘ」
では具体的に「棒でさけの頭を打つ」と書いてあ
る. この点から, 漁夫の持つ長い棒が鮭を叩くも
のであることがわかる.

図13は明治初期に描かれた最上川河口の「鮭大

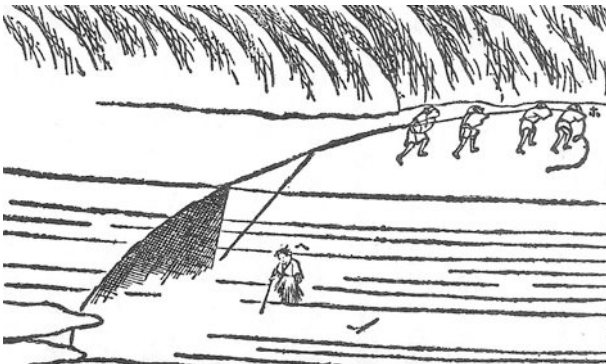


図12. 『利根川図誌』中の魚叩き棒 (赤松, 1855) .



図13. 『鮭大網の図』 (作者不明) 第7図 (上ゲタル魚仕末ノ図) の魚叩き棒 (犬塚, 2006) .

網の図」 (7枚組, 山形県酒田市至道博物館所
蔵) の第7図 (上ゲタル魚仕末ノ図) の一部であ
る. 3人の漁夫が長い棒で水揚げされた鮭を叩い
ている. 注目は図10と同じく棒で, 長さは優に 1
m以上あるとみられる. このような長い魚叩き棒
は現存していないが, 後述する平澤屏山が描いた
絵の中にもある.

2. アイヌの魚叩き棒に関する記録

2-1. 古記録と絵図のなかの魚叩き棒

ここではアイヌの魚叩き棒に関連する古記録や
絵図について述べる. アイヌの魚叩き棒に関する
記録で最も古いものは, 元禄元 (1689) 年に石狩
川に來た快風丸の蝦夷地探検記録が元となって書
かれた「快風丸蝦夷聞書」であろう. それには
「鮭石カリ川へ初秋ヨリ上ルコトヲビタダシ棒ニ
テ打殺シ或ハ色々ニテ取ル川バタ木ヲ渡シカケテ
ホシカラサケ今所へ來ルナリ」 (下線筆者) とい
う記述がある (北海道郷土資料研究会, 1959) .

注目されるのは「棒ニテ打殺シ」と書いてい
ることから, この「棒」はアイヌ民族の「魚叩き
棒」と判断される. 快風丸が石狩河口に入津した
ときはサケ漁の時期で, この記録は河口付近で目
撃されたことを基に記述されたと考えられる.

次はアイヌの魚叩き棒そのものを描いた絵図の
例である (図14) . 図は『蝦夷器具図式』 (谷,
1799a) に収録されている「打魚槌図」である. こ
の図は寛政11 (1799) 年, 北海道の太平洋側 (当
時の東蝦夷地) の魚叩き棒を記録したものとみら
れる.

谷元旦 (1778~1840) は江戸幕府の東蝦夷地の
上地 (知) にともなう調査団の絵師である. 彼の
調査日記『蝦夷蓋開日記』 (谷, 1799b) には「松

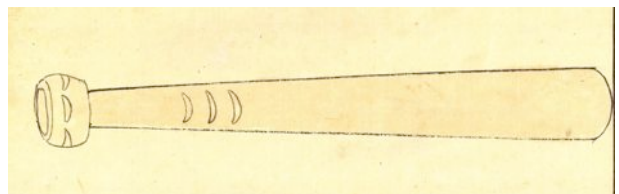


図14. 谷元旦 打魚槌図.

平信濃守〔忠明〕及び監司以下八百余人，彼国に至る．予亦図画の役に役せられて，その国風，人物，山水，器用，産物等をうつしき．」と記されている．元旦らは寛政11（1799）年3月24日に江戸を出発して4月22日松前着．4月28日松前出発して7月2日厚岸着．7月4日厚岸出発して9月2日松前到着，最終的には江戸には9月27日帰着している．この日程から考えて実際使用中の魚叩き棒を描いたと判断される．

この棒の特徴は「バット状」の形と柄の近くとグリップエンドに刻まれた半月形の彫刻である．大塚和義（1991）によると，この彫刻は家紋あるいは所有を示す印で「イトッパ」だという．菅（1994）は，このような形の魚叩き棒が「元旦記載時には和ん文化が相当アイヌの生活に混入していたこともあり，その形式の保有される文化的背景はまだ一考の余地がある」と述べている．つま

りこうしたタイプは和ん文化の影響下にあった可能性も考慮すべきだと主張しているものと思われる．

確かに魚叩き棒は本州にも広く分布しており，北海道アイヌの魚叩き棒がどのように成立したかについては不明な点がある．しかし後述するように北海道内の遺跡出土の魚叩き棒とみられる木製品にもこの形の棒があり，この形状の魚叩き棒が北海道の縄文文化から連続性する可能性があると筆者は考えている．

次の平澤屏山の明治初期の魚叩き棒も「バット状」であり，北海道の太平洋岸の伝統的な形の魚叩き棒とも考えられる．図15～18の絵図は箱館（現函館市）の絵師平澤屏山が描いたマス漁関係の図である．同じ下絵を使用したとみられ，製作年代は彼の晩年で明治5（1872）～9（1876）年ごろと推定されている（佐々木，2004）．



図15. 平澤屏山「アイヌ風俗12ヶ月屏風 7月鱒漁図」部分（市立函館博物館蔵）．



図16. 平澤屏山「蝦夷人川魚を捕る図」部分（函館市立中央図書館蔵）．



←図17. 図15の部分拡大．



図18. 図16の部分拡大．

屏山は箱館の場所請負人杉浦嘉七の知遇を得て彼が経営する十勝地方（太平洋岸）の請負場所に住んで、アイヌとの交流もあったようだ。これらの図も十勝での体験を踏まえ描かれたとみられる。

図15は「アイヌ風俗12ヶ月屏風」の中の「7月鱒漁の図」の一部である。鱒の遡上を妨げる柵（テシ）の前にある台（テシサン）の上で老人が三角網で漁をしているようすが描かれている。老人の左足近くに魚叩き棒が置かれている（図17）。棒は優に1 m以上ありそうな長いもので、樹皮はみられない。柄は極端に細く描かれているが、肉眼観察すると末端部近くに直径方向に線が引かれている。この線は柄とグリップエンドの境界を示す線と考えられ、この魚叩き棒はたんに棍棒状のものでなく「バット状」魚叩き棒と考えることができる。

また図16は平澤屏山の「蝦夷人川魚を捕る図」である。棒の部分（図18）を拡大してみると紐とグリップエンドが確認される、明らかに「バット状」の魚叩き棒であることがわかる。

このように2点の魚叩き棒は、先に示した谷元旦の「打魚槌図」（図14）と同型式とみることが可能である。

2-2. アイヌの魚叩き棒に関する文献

次にアイヌの魚叩き棒に関して述べた文献をいくつかあげておきたい。

最初はジョン・バチェラー（1925）の『アイヌ人と其説話』に出てくる魚叩き棒を紹介する。魚叩き棒に関する最初の具体的記述であり、胆振地方での見聞が基となっているとみられる。それによると「鮭を殺すに特筆に値する珍奇なものがある。アイヌは鮭漁に際し常に二尺位の太き柳棒を携え鮭を敲き殺すのでこの棒をイサバ・キク・ニ『頭敲棒』という。アイヌの話によれば鮭は石又は他の木で敲かれるを好まず柳棒で殺さるるのを甚だ喜ぶのである。真にイサバ・キク・ニを尊敬している。若し他の物を用ゆれば変じて遁げる」と書かれている。この記述から長さは二尺（60cm

余り）とやや長く、ヤナギの使用、石や他の木の使用に関する禁忌などの情報を知ることができる。

次は知里真志保（1944a）の「樺太アイヌの生活」中で北海道と樺太（現サハリン）のアイヌの魚叩き棒について次のように記載している。

「鮭、鱒の漁に用いるイサパタニは、アイヌにとって重要な漁具の1つである。

長さ1尺3寸位の柳又はハンの木の皮付きのもので作る。口径1寸位で、握る部分は皮を剥ぎ取り、やや細くしてある。漁に出る際、腰に差して行く。北海道ではイサパキニ（i-sapa-kiki-ni「その・頭を・打つ・木」）と云ひ、皮を剥いだ部分と皮つきとの境に削り掛けを附してある。樺太のものはこれを附していない。」

この記述と図19（知里, 1976）から次の4点のことがあげられる。

- ①北海道アイヌだけでなく樺太（サハリン）アイヌにも魚叩き棒があった。
- ②樺太では握りを細くする加工のものがある。
- ③北海道では握りの加工と削り掛けのつく叩き棒がある。
- ④樹種はヤナギやハンノキで作る。

さらにこの図には「ここで打つ」と具体的な作業部分が示されている。漂着した魚叩き棒にも、示されたものと同様の場所近くに「敲打痕」が認められる（図4参照）。

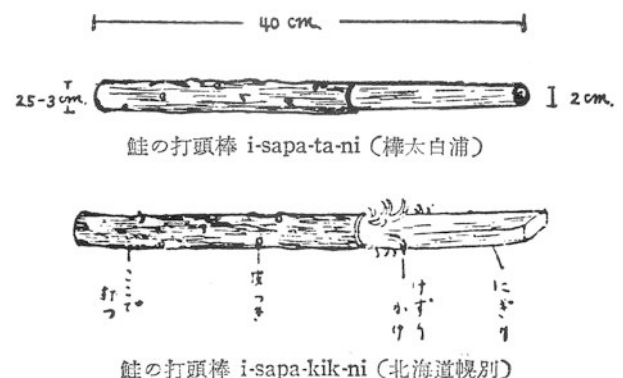


図19. 樺太と北海道の魚叩き棒（知里, 1976）。

次に、佐藤三次郎（1973）の『北海道幌別漁村生活誌』の魚叩き棒について記載する。この記録では明治末ごろの幌別の魚叩き棒について書かれている。なお、佐藤は知里真志保の親戚である。表題にある「幌別漁村」は現在、登別市内となっている。

「かうしてどんどん獲った魚は一本づゝイサパキッキニと云う叩棒で頭を叩いて殺す。この叩棒は、直径1寸位、長さ一尺5寸位のもので、五分位の中（下線筆者）で細長く三ヶ所だけ剥いである。握る所五寸位は全口皮剥いで、少し細く削つてある。」

この中で、注目されるのは「五分位の中（下線筆者）で細長く三ヶ所だけ剥いである。」（下線筆者）という部分である。この記述から記録された叩き棒は図20に示した棒と同じタイプと考えられる。図20は北海道博物館所蔵（資料番号89595）で、千歳市蘭越で採集された資料である。この棒も敲打部の樹皮を4面縞状に剥いである。敲打部の樹皮を縞状に剥ぐ例はこの2点のみであるが、資料と記録が一致した例であり、注目される。

なお、第19図で示したように「幌別」では柄部の樹皮を剥ぎ、削り掛け（キケ）のついた魚叩き棒もみられ、少なくとも2種類（棒状とバット状）の叩き棒があったことが読み取れる。

ところで魚叩き棒の使用後はどのようなのだろうか？ この点については、知里真志保（1944b）が次のように述べている。

「この打頭棒はとくに大事にされて、漁期ごとに新しいものを作つて用い、用がすめば戸外の幣場に持つて行つてその魂を天国に送り返すのである。」

この記述から魚叩き棒が本来、非常に残りにくい性格を持つ道具であることが理解される。おそら



図20. 北海道博物館資料番号89595の魚叩き棒。

く、博物館等の資料で使用された魚叩き棒が少ない理由も、このような処理と関連するのだろう。

3. 博物館等に収蔵されているアイヌの魚叩き棒

次に北海道内の博物館等を中心に、収蔵されているアイヌの魚叩き棒（イサパキッキニ）について述べる。収蔵されている資料はすべて北海道内で製作されたものと考えられる。

調査にあたって『アイヌ史料編2 民具等資料所蔵目録（1）』（北海道ウタリ協会アイヌ史編集委員会編、1988）などを参考に各地の博物館等に問い合わせたところ、北海道には19施設に約40点、北海道外の1施設（国立民族学博物館）に4点の魚叩き棒が収蔵されていることが確認された。調査は、国立民族学博物館（大阪府）を含む13施設31点の資料を調査した。基本的なデータは表2に示した。

すでに「2-2. アイヌの魚叩き棒に関する文献」の項で述べたように、実際使用された魚叩き棒は、使用後「送り場」に置かれ、朽ちていくはずの資料である。一部、実際使用された資料も収蔵されているが、大半が新たにアイヌの人に依頼し製作されたものである。製作理由は博物館展示資料あるいは北海道開拓百年記念で入植などの歴史展示の一部とするためである。

調査は筆者自身で撮影、観察、記録計測を行うことを原則としたが、北海道立北方民族資料館は筆者の都合により訪れることができず、担当学芸員からデータを得て、それを表に記載した。資料名称はその施設での収蔵あるいは展示名称であるが、収蔵された時点と展示替えなどで名称が変化した例もある。アイヌ語名は「イサパキッキニあるいはイサパキニ」などで、多くの展示施設ではアイヌ語と併記されている場合が多い。

樹種は一部不明なものもあるが、ほぼヤナギやミズキである。博物館等に収蔵されている魚叩き棒の形態については以下の2種がある。なお博物館等所蔵のアイヌの魚叩き棒については菅豊（1994）がすでに「直棒型」と「バット型」に分

表 2. 博物館等に所蔵されている魚叩き棒.

調査施設名	収蔵番号	名称	全長 (mm)	先端径 (mm)	末端径 (mm)	キケ	樹皮有無	形状	シロシ	樹種	木取り	備考
いしかり 砂丘の風資料館	No. 4	魚叩き棒	530	3.3	21	有	有 柄部	棒状	無	ヤナギ	丸木	2011年平取町 アシリチェブ使用
	No. 5	魚叩き棒	535	37	32	有	有 柄部	棒状	無	ヤナギ	丸木	2011年平取町 アシリチェブ使用
	No. 6	魚叩き棒	490	34	37	有	有 柄部	棒状	無	ヤナギ	丸木	2011年平取町 アシリチェブ使用
	No. 7	鮭叩き棒	420	55	55	無	無	バット状	無	?	丸木	2007年製作伝 北洋漁業・鈎付
	No. 8	鮭叩き棒	500	55	30	有	有 叩き部	棒状	無	ヤナギ	丸木	2007年製作
北海道博物館	44274	魚打ち棒	410	31	35	無	無	バット状	無	?	丸木	黒塗り
	44275	魚打ち棒	355	35	30	無	無	バット状	無	?	丸木	黒塗り
	89595	魚打棒	410	35	39	無	有 叩き部	バット状	無	ヤナギ	丸木	樹皮縞状
	89596	魚打棒	365	24	20	有	有 叩き部	棒状	無	ヤナギ	丸木	キケ四力所イナウ状?
森町郷土資料室	1777	魚打棒	355	35	35	有	有 全体	棒状	H	ヤナギ	丸木	
浦河町立 郷土博物館	571	叩き棒	325	35		有	有 全体	棒状	H	ヤナギ	丸木	
旭川市博物館	681	魚頭叩棒	365	33	30	有	有 全体	棒状	H	ヤナギ	丸木	
	682	魚頭叩棒	365	30	25	有	有 全体	棒状	H	ヤナギ	丸木	
	4098	魚頭叩棒	360	24	22	有	有 全体	棒状	無	ヤナギ	丸木	キケ四力所イナウ状?
	4099	魚頭叩棒	363	23	20	有	有 全体	棒状	H	ヤナギ	丸木	
	4100	魚頭叩棒	363	35	28	有	有 全体	棒状	H	ヤナギ	丸木	
	4101	魚頭叩棒	365	40	35	有	無	棒状	無	ヤナギ	丸木	
釧路市立博物館	14005	なづち棒	471	57	50	無	無	バット状	無	ヤナギ?	丸木	1941 (昭和16) 年 採集 実用品?
士別市立博物館	1420	魚叩き棒	372	38	37	有	無	棒状	〃〃 	ヤナギ?	丸木	イバ イ?
	1421	魚叩き棒	380	33	35	無	有 柄部	棒状	〃〃 	ヤナギ	丸木	
新ひだか町博物館	9756	魚叩き棒	580	25	2	無	有 柄部	棒状	無	ヤナギ	丸木	
	9757	魚叩き棒	550	24	2	無	有 柄部	棒状	無	ヤナギ?	丸木	
苫小牧市 美術博物館	D-19	なづち棒	350	20	18	有	有 全体	棒状	H	ヤナギ	丸木	
名寄市北国博物館	S-34	魚叩き棒	450	28		有	無	棒状	〃	ヤナギ	丸木	
	S-35	魚叩き棒	475	3		有	有 全体	棒状	〃	ヤナギ	丸木	
北海道大学植物園	10295	魚揆棒	410	42	25	無	有 叩き部	バット状	無	ヤナギ	丸木	1938(昭和13)年収集 実用品 使用痕有
	32532	魚揆棒	380	2.2	2	無	有 柄部	棒状	無	ヤナギ	丸木	
	9729	(模型附属品)	115	9	6	有	有 柄部?	棒状	無	ヤナギ	丸木	テシサン模型附属品
北海道立 北方民族博物館	H1191	サケ叩き棒	434	34		有	有 柄部	棒状	無	ミズキ	丸木	
	H1192	サケ叩き棒	434	34		有	有 柄部	棒状	無	ミズキ	丸木	
国立民族学博物館	K0002106	魚叩き棒	328	4.5		無	無	バット状	無 刻線	ヤナギ	丸木	19末20 c 初頭 明治末から大正? 実用品
	H0062280	魚叩き棒	350	30		無	無	棒状	〃〃 	ヤナギ?	丸木	
	H0062281	魚叩き棒	360	30		有	有 全体	棒状	〃両面	ヤナギ	丸木	表裏にシロシあり
	H0062385	魚叩き棒	340	3.1		有	有 叩き部	棒状	無	ミズキ?	丸木	

注) 表の項目で「キケ」とはイナウ(木幣)にみられる木肌を刃物で削った装飾=削り掛けのことである(図25, 26, 27参照)。また「シロシ」はH状や〃状の刻みとのような彫刻のことである(図24, 26参照)。

類している。

表2のとおり「バット状」と「棒状」があり、「棒状」の叩き棒が多い。

- ①「棒状」とした魚叩き棒は素材の枝や若木の幹の形状をほとんど変えないタイプ。
- ②「バット状」とした魚叩き棒は、柄部とグリップエンドをもつ野球のバットのようなタイプ。

なお、いしかり砂丘の風資料館の資料番号No.7（図21）は「バット状」に含めたが、この資料はかつて北洋漁業で使用されていたという先端に金属の鉤をつけた特異な魚叩き棒の復元品である。厳密には他の「バット状」とは異なる資料である。製作者は「カムサッカ型」と呼んでおり、戦前石狩市や北洋漁業で使用されていたと語っていたが、調査しても知る人は見つけられていない。また収蔵番号9729（図22）は北海道大学植物園のアイヌのサケ・マス捕獲施設の模型に附属したミニチュアの魚叩き棒で、長さ11cmのもので、これも参考品である。以下、「棒状」「バット状」順で代表的な資料を示す。

3-1. 「棒状」の魚叩き棒

1. 図23 石狩市いしかり砂丘の資料館の収蔵品。表2のNo.4の叩き棒。長さが50cmを超え、柄は樹皮を残し両側に羽のような削り掛け（キケ）が付けられている。この資料は平取町で製作されアシリチェブノミで実際に使用された魚叩き棒で、他に同型のものが2点ある。なお、この棒には別作りの削り掛け（キケ）が付属している。製作者は、祭儀ということで別に作って巻いた、と語っている。

2. 図24 石狩市いしかり砂丘の風資料館所蔵（No.8）のもので展示用に依頼して製作してもらったものである。これは前記とは反対に敲打部に樹皮を残しており、柄は樹皮を剥がしている。また細く縮れた削り掛け（キケ）が一周している。



図21. いしかり砂丘の風資料館No.7（カムサッカ型）。



図22. 北海道大学植物園9729（ミニチュア模型）。



図23. いしかり砂丘の風資料館蔵。平取町で製作使用。



図24. いしかり砂丘の風資料館No.8。



図25. 旭川市博物館4100。



図26. 森町郷土資料室蔵。

3. 図25 旭川市博物館収蔵番号4100の魚叩き棒である。全体に樹皮を残し、柄側の末端部近くの両側に削り掛け（キケ）を付けたタイプで、「H」形のシロシが付けられている。太さは両端でほとんど変わらないが先端部の方がやや太い。一説に柄も先端もどちら側で叩いてもかまわないという話も聞くが、やはり振り下ろす道具であるから、バランス的には太い側で叩くのが普通であろう。先端が細い場合もあるが稀である。

これと同形で「H」形のシロシをもつ資料は旭川市博物館に他に3点、浦河町郷土資料館、森町郷土資料室（図26）、苫小牧市美術博物館に1点ずつ計7点ある。いずれもH形のシロシから同じ作者、あるいはその人から作り方を伝承した人が製作したものとみられる。

4. 図27 やはり旭川市博物館の資料（4101）で、樹皮をすべて除去し末端部近くの両側に削り掛けがあるタイプである。

5. 図28 名寄市北国博物館の収蔵資料（S-35）で、内皮が薄く残るが、ほぼ全体の樹皮を除去した魚叩き棒で、両側に削り掛けがある。また「ㄥ」形のシロシがある。これと同じシロシが付けられた魚叩き棒は他にもう1点ある（図29上）。こちらはS-35とは対照的に樹皮が全体に残されているが製作者は同じである。

さらに国立民族学博物館のH0062281にも類例がある。ただこの資料には1カ所でなく表裏2カ所にシロシがみられる。

6. 図30, 31 士別市立博物館所蔵の魚叩き棒で、1点は全体の樹皮が無く（図30上1420）、もう1点は持ち手だけに樹皮がある（図30下1421）。これら2点に共通するのはシロシであるが、これまでの事例でみたものとは異なり、2個一組の「ㄥㄥ」シロシに重ねて「ㄣ」の形のシロシが組み合わせられている（図31）。これに似たシロシは国立民族学博物館のk00062290にもみられる（図32）。ただ、こちらはㄥㄥ形状が直線的、ㄣ



図27. 旭川市博物館4101.



図28. 北国博物館S-35.



図29. 上S-34, 下S-35. シロシ.



図30. 士別市立博物館1420, 1421.



図31. 1421のシロシの拡大.

も線彫りになっている点が異なっている。国立民族学博物館の方の製作者は不明ということであるが、類似性が高く同一作者の可能性もある。また、樹皮のない1420(図30上)の削り掛けは1カ所だけで、あたかもイクパスイ(棒酒箸)に付される削り掛けのような形状である。士別市博物館資料の製作者は旭川市の人である。

なお、型のシロシは河野広道(1934)のエカシイトクパ(父方の系統を表す印)の例示の中の第1図7に酷似している。これは旭川の人イイトクパだという。

以上、「棒状」の魚叩き棒の主要なものを上げたが、これら以外に「棒状」に分類したが特異な魚叩き棒があるので例示する。

7. 図33, 34, 35 特異な魚叩き棒

北海道博物館(89596, 図33)は柄の部分に樹皮を残し、敲打部は樹皮を取ったタイプで、この部分にキケ(削り掛け)が3対6個付けられている(図34)。柄の末端の小口の一部を斜めにカットしており、イナウ(木幣)のような加工にもみえる。先端部がボサボサで削り掛けにも摩滅がみられるので、実際に使用された可能性もある。

もう1点は旭川市博物館4098(図35)で全体に樹皮を残し、中ほどに向かいあう2対4カ所の削り掛け(キケ)が付けられた魚叩き棒である。この資料は柄部と敲打部の区別が付かない作りとなっており、両方が柄と敲打部になる可能性がある。

知里真志保(1976)では「注3—鮭を捕えた時その頭を叩いて殺す打頭棒わ、アイヌわそれを『イ・サパ・キッ・ニ』i(そのの)-sapa(頭)-kik(打つ)-ni(棒)と云っている通り、言葉の上でわ -ni(棒)として表わされる。これわ、それが本来わ鮭をとるための漁撈の具たる『シト』(棍棒)にすぎなかったことを示すのである。ところが、実物の形式を見ると、幣の削りかけが附けてあって、もはや単なる棍棒でわなく、まさに歴とした『シト・イナウ』(棒・幣)なのである。しかも、実際に

それで鮭の頭を打つ時にわ『イナウ・コル(木幣を・持って行け)!イナウ・コル(木幣を・持って行け)』と唱えながら打つのも知れる通り、今は神え贈る『イナウ』(幣)と考えられるのである。Situ→situ-inaw→Inawの進化がみごとに完成されているのである。」と述べており、北海道博物館89596(図33)はこうした知里の考えを裏付ける例とも考えられる。

3-2. 「バット状」の魚叩き棒

「バット状」の魚叩き棒としたのは、柄部(握



図32. 国立民族学博物館k00062290のシロシ全体(表裏合成画像)。



図33. 北海道博物館89596.



図34. 89596の削り掛けの拡大.



図35. 旭川市博物館4098.

り)とグリップエンドをもつ、全体形状が「野球のバット」を縮小したような形の魚叩き棒である。例えば「2-1. アイヌの魚叩き棒に関する古記録」で述べた谷元旦や平澤屏山の絵にある魚叩き棒もこの範疇に入る。

1. 図36 北海道博物館所蔵の資料(44275)で、樹皮を除去し、小さいがグリップエンドがある。恵庭市の人が製作した。この魚叩き棒の特徴は全体を黒く塗ってある点で、塗料の種類も塗った理由も明らかでない。このほかに同じタイプで黒塗りのものがもう1点(44272)ある。製作者は同じである。「棒状」の叩き棒も含め、塗装した例はこの2点以外なく、きわめて珍しい例である。

2. 図37 北海道大学植物園蔵(10295)の敲打部に樹皮を残し、柄とグリップエンドを作り出した「バット状」の魚叩き棒である。この棒は昭和13(1938)年の収集のもので、敲打部と先端に顕著な使用痕があり、実際に使用されたことが確認される。残念ながらどこで使用されていた資料かは不明である。この資料は漂着した棒(図38)と極めて類似性が高い。また先端の剥がれた状態は、すでに述べた日本海さけ・ます増殖事業協会の魚叩き棒(図8)と共通している。

3. 図39 釧路市博物館所蔵の魚叩き棒である。この棒はシロシを除くと、谷元旦(図40)や平澤屏山の絵図の叩き棒とかなり類似性の高い資料である。この資料は昭和16(1941)年北海道東部の標茶町で採取されたもので、顕著な使用痕は認められないが、部分的に汚れがあり、しばらく屋根裏などで保管されていた可能性がある。この点から展示用に製作されたものではないように思われる。なおこの資料については現在の展示名は「なづち棒」であるが、採集時の台帳記載では「魚叩き棒・いばきぎに」となっている。菅豊(1994)が指摘した「なづち棒」という名称は、後に変更されたものであり、菅のいう「和人の意匠の影響



図36. 北海道博物館44275.



図37. 北海道大学植物園10295.



図38. 石狩浜漂着の魚叩き棒.



図39. 釧路市博物館 なづち棒.

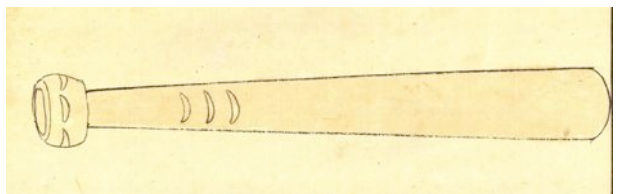


図40. 谷元旦(打魚槌図).

を受けた」のでは、というのはあたらない。

4. 図41 国立民族博物館のK0002106で北海道東部の幕別町で採取された資料である。採取時の名称は「棍棒」であるが「魚ヲ撲殺スルニ使用スル搗粉木形ノ一種ノ棍棒、長サ一尺八寸」と記録されており、魚叩き棒として採取されたことがわかる資料である。

展示中で詳しい観察は行えなかったが、握りの



図41. 国立民族学博物館K0002106.

部分が黒ずんで変色しており、使用の痕跡と考えられる。この資料の特徴は握りから敲打部に刻まれた短刻線である。シロシとは考えられないが、叩く際の機能と関連する刻みかも知れない。展示解説によれば使用年代は「19世紀末から20世紀初頭」とされ、現存する博物館等収蔵の魚叩き棒のなかでは最も古く収集された資料といえる。

以上、博物館収蔵のアイヌの魚叩き棒について特徴的なものを例示してきたが、「バット状」の魚叩き棒の中に実際使用されていたものがある。

「棒状」の魚叩き棒では使用されたとみられるものはほとんどみられない。「棒状」の魚叩き棒では、樹皮の残し方やキケの付け方、形で細分が可能であるが、今回はこれ以上の細分はおこなわなかった。

4. 遺跡出土の魚叩き棒

北海道内の6つの遺跡から、魚叩き棒とされる棒状の木製品が出土している（表3）。表に示した所属時期、年代は、それぞれ縄文文化中期後半（約4000年前）から続縄文文化前半期（西暦3世紀以前）、擦文文化後期（西暦10世紀以降）、中世アイヌ文化（西暦13世紀以降）近世アイヌ文化（西暦16世紀～1736年以前）と考えられる。

総数22点で、中世アイヌ（文化）から近世アイヌ（文化）に属するとするものが14点あり、過半を占める。なお表中「横槌」とあるのは考古学などの木製品分類で、「ヨヅチは敲打部と柄部から構成され、それがヨコ一直線に連続していて、柄部を握って振りおろし敲打部でものを叩くという道具である」（渡辺, 1989）形態の槌のことである。

遺跡出土の木製品で「魚叩き棒」とする分類は、今のところ北海道だけのものである。魚叩き棒と推定された木製品を出土した遺跡は、常呂川河口遺跡を除き大河川の支流に立地しており、サケ・マス漁に使用されたと考えられる河川漁施設あるいはその可能性のある杭列等も発見されている。

また、遺跡出土の魚叩き棒とされる木製品の樹種は、博物館等に収蔵されている資料とは異なりかなりばらつきがある。さらに3.1で述べたような「棒状」の魚叩き棒は今のところ確認されていない。この種の魚叩き棒が未発見の理由は、加工が簡単な棒状では埋蔵されている間に、柄や敲打部に残された樹皮や削り掛け（キケ）が腐朽して確認できなくなることなどに起因する可能性がある。

以下、札幌市K39遺跡の出土品は収蔵庫改修のため調査できなかったもので、これを除く5遺跡で魚叩き棒とされている木製品について述べる。

4-1. 石狩市石狩紅葉山49号遺跡出土の魚叩き棒

図42, 43など「バット状」の魚叩き棒と形状がよく似ている。やや反りのある木を使っている。明確なグリップエンドと柄の部分の削り出している。両端は石斧で斜めに削られている。敲打部は



図42. 石狩紅葉山49号遺跡出土の魚叩き棒実測図（石狩市教育委員会, 2003）。



図43. 石狩紅葉山49号遺跡出土の魚叩き棒。

それほど傷が無い点から、樹皮が残されていた可能性がある。樹種はトネリコ属である。この遺物が出土した傍にはサケ・マス漁に使用されたとみられる漁労施設などが存在し、その点からも魚叩き棒の可能性が高いと考えられる。

4-2. 江別市江別太遺跡出土の魚叩き棒

図44 北海道の遺跡出土の資料で最も早く魚叩き棒ではないかと推定された資料である。発掘当初の報告では「漁獲に使用された棍棒か」と記載され、1981年の「漁撈の道具－江別太遺跡出土を中心として」（高橋, 1981）で「サケ叩き棒」とし

表3. 北海道内の遺跡出土の魚叩き棒と推定される木製品一覧.

市町村	出土遺跡名	遺物番号	遺物の時期	報告名	樹種	木取り	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	報告年	備考
石狩市	石狩紅葉山49号遺跡	97136	縄文文化 中期後半	魚たたき棒	トネリコ属	丸木	510	40		2005	バット状
江別市	江別太遺跡	2030	続縄文文化 前期	サケ叩き棒	トネリコ属	丸木?	500	40		1979	敲打部刻み線
千歳市	1カヅ シC15遺跡	962	続縄文～擦文 文化前期	魚叩き棒	ヤナギ属	丸木	426	34	32	2000	柄部敲打部より大
		4110		魚叩き棒	ヤナギ属	丸木	387	35	2	2001	彫刻入敲打部面取り
		4091	擦文文化後期	魚叩き棒	オニグルミ	1/4割	-392	33	27	2001	
		878		魚叩き棒	ノリウツギ	丸木	427	35	36	2001	全体に軽く面取り
		4698		魚叩き棒	ヤナギ属	丸木	430	27	27	2001	全体に軽く面取り
札幌市	K 3 9 遺跡	63	擦文文化後期	横槌	ヤナギ属	丸木	460	40		2001	柄部のみ加工 柄長
千歳市	1カヅ シC15遺跡	3549	中世アイヌ文化	魚叩き棒	ニレ属	丸木	456	29	28	2002	全体に面取り 角穴あり
		3434		魚叩き棒	ヤナギ属	丸木	441	32	35	2002	全体に面取り
千歳市	美々8遺跡	10819	近世アイヌ文化	横槌	クワ	丸木	599	49	49.6	1996	バット型 キケ跡でない
		6673		横槌	モクレン	板柱	297	48	48	1997	彫刻 紐かけ使用痕顕著
		10101		横槌	オニグルミ	丸木	482	26.5	47	1997	全体に軽く面取り 柄長い
千歳市	1カヅ シC15遺跡	2	近世アイヌ文化	魚叩き棒	ハシドイ属	丸木	403.5	35	31	1998	全体に摩耗
		5636		魚叩き棒	ハンノキ属	丸木	455	32	32	2002	全体に面取り
北見市	常呂川河口遺跡	BB44	近世アイヌ文化	魚叩き棒	コナラ節	丸木	480	30		2007	イトクバ
		BB44		魚叩き棒	ヤナギ属	丸木	470	40		2007	グリップエンド紐かけ
		Y35		魚叩き棒	コナラ節	丸木	470	38		2007	キケ痕跡 使用痕あり
		Z38		魚叩き棒	不明	丸木	380			2007	炭化
		T654		魚叩き棒	トネリコ属	丸木	400	50		2007	横槌?
		T777		魚叩き棒	トネリコ属	丸木	402	36		2007	横槌?
		T772		魚叩き棒	トネリコ属	丸木	465	31		2007	グリップエンド紐かけ痕

*本表は（藤井, 2008）を元に筆者が編集加筆した。

て報告された。この資料は両端を削り成形して浅い握りをつけたもので、敲打部と握りの太さは差がない。敲打部には刻線がある。高橋はこのほかに「太さ3～5cmの木を30～50cmに切断した棒が数点発見されており、これらはヤナギ、ミズキなどでつくられたイサパキツクニ（叩き棒）であろう」と述べているが、これらは未完成品あるいは別な木製品の素材の可能性があり、なお検討を要する資料である。



図44. 江別太遺跡出土の鮭叩き棒（北海道先史学協会, 1979）。

4-3. 千歳市ユカンボシC15遺跡出土の魚叩き棒

図45～図48 この遺跡では9点の魚叩き棒とされた木製品が9点ある。層位的な検討から続縄文文化～擦文文化前期の叩き棒1点（図45, 962, 北海道埋蔵文化財センター, 2000）、擦文文化後期の叩き棒4点（図46, 4110, 4091, 878, 4698, 北海道埋蔵文化財センター, 2001）、中世アイヌ文化の叩き棒2点（図47, 3549, 3434, 北海道埋蔵文化財センター, 2002）、近世アイヌ文化の叩き棒2点（図48, 2, 5636, 北海道埋蔵文化財センター, 1998；2002）である。

形態的には近世アイヌ文化期の2点を除く、続縄文文化～擦文文化前期、擦文文化後期、中世アイヌ文化と所属時期の叩き棒の方が全体を丁寧に加工して、むしろ近世アイヌ文化期とされた2点の方が、敲打部の加工がされておらず、粗雑な作りである。この遺跡で魚叩き棒とされた木製品の特徴はグリップエンドが明確でなく、敲打部との境界も不明瞭なものがあり「棒状」と「バット状」の中間的形態をとるものが多い。また使用されている樹種も6種類と多い。ここで注目される資料は擦文文化後期のグリップエンドを持ち、柄と敲打部の境に彫刻のある叩き棒である（図

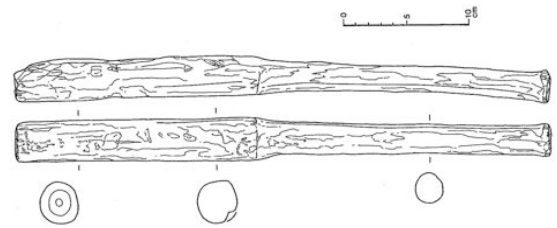


図45. 続縄文文化～擦文文化前期. 962
（表3 遺物番号に対応。以下同じ）。

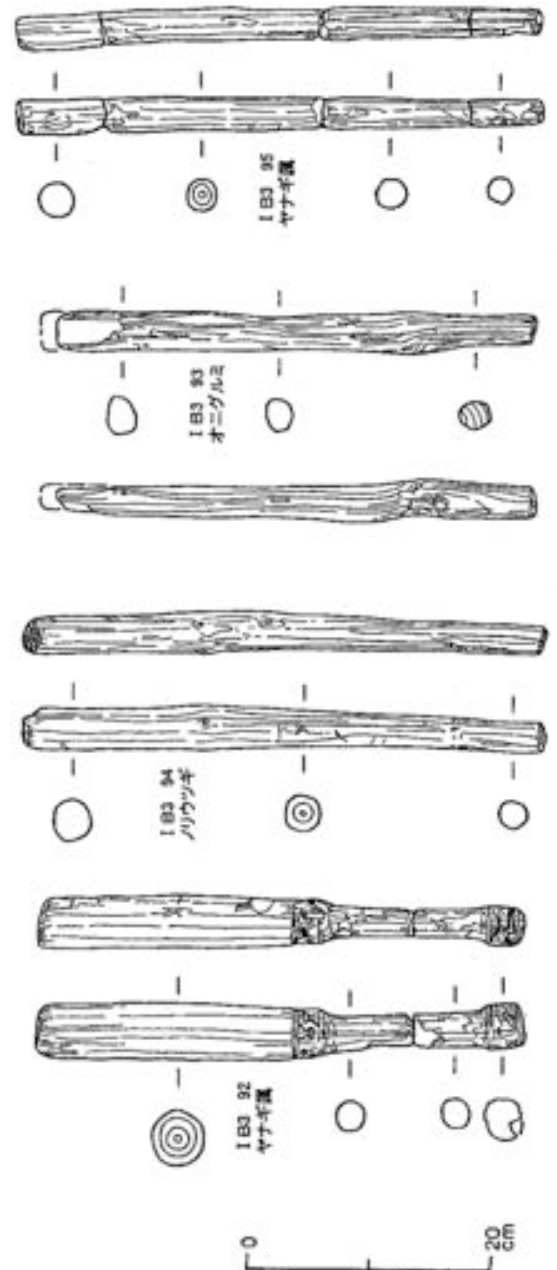


図46. 擦文文化後期.
上から4698, 4091, 878, 4110.

46) . この資料の使用痕は先端部と敲打部の先端部よりの部分に集中しており，かなりの頻度で使用されたことが窺われる。

また，彫刻はシロシのような印とも思えるが，この時期にそのような伝統がすでに生まれていた

のかどうか他に類例が無く確認できていない。

4-4. 千歳市美々8遺跡出土の魚叩き棒

図49～図52 この遺跡では，近世アイヌ文化期の

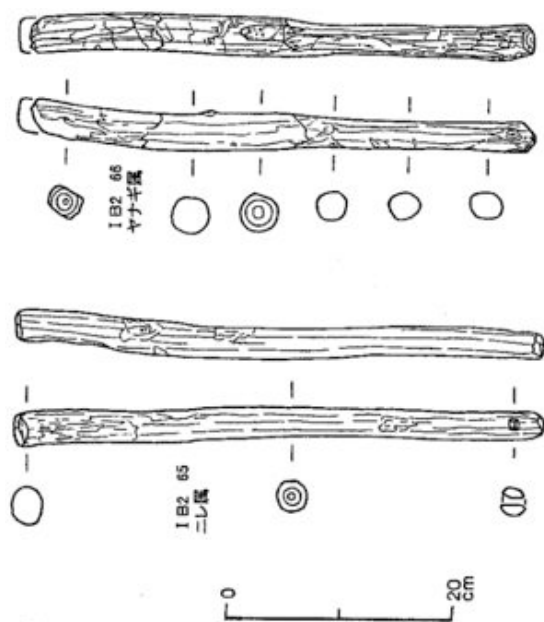


図47. 中世アイヌ文化. 上から3434, 3549.

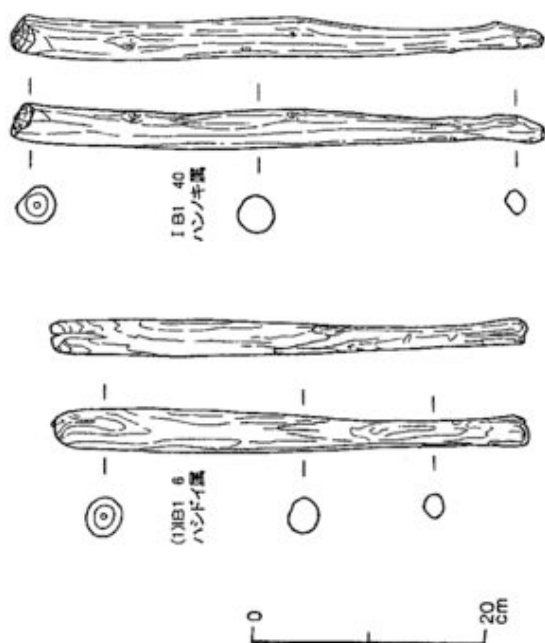


図48. 近世アイヌ文化. 上から5636, 2.

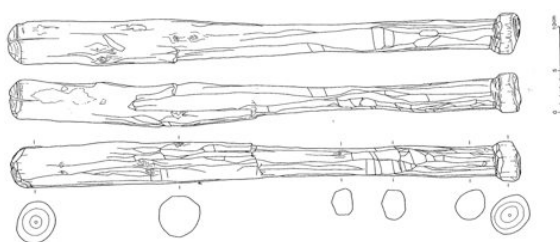


図49. 美々8遺跡10819.



図50. 美々8遺跡10819の二次加工痕.

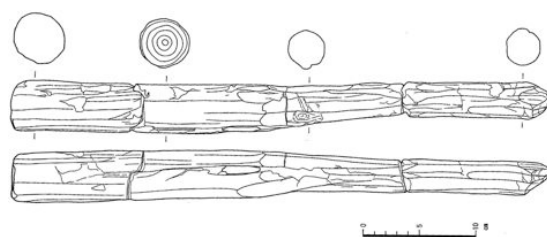


図51. 美々8遺跡10101.

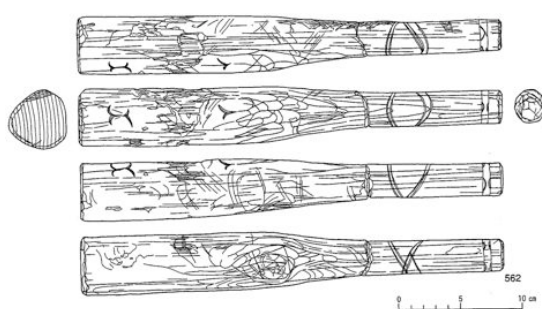


図52. 美々8遺跡6673.

文化層から3点の魚叩き棒と考えられる木製品が出土している。名称も横槌となっている。調査年が古いことから、魚叩き棒は念頭にあったものの、当時はその名称は積極的に使用しなかったようである。ここでは「バット状」でグリップエンドを持ったタイプ（図49、北海道埋蔵文化財センター、1996）、前出のユカンボシC15遺跡で多数をしめる敲打部と柄部の境が明瞭でないタイプ（図51、北海道埋蔵文化財センター、1997）、割り材を使用し柄と敲打部の境に文様が彫刻された魚叩き棒の3種がみられる（図52、北海道埋蔵文化財センター、1996）。

「バット状」の魚叩き棒としたものは遺物番号10819で、樹種がクワで全長が60cm近くあり、博物館収蔵の資料を含めて最長の資料である。明瞭なグリップエンドをもつが、敲打部が全長の半分以下で柄部が長く特異な形をしている。先端部付近を中心に使用痕が顕著にみられる。また柄部でもっとも細くなった部分は成形後の二次加工がみられる（図50）。

削り掛け（キケ）の痕跡のようにも見えるが

幅、厚さとも5mm以上あり鉈状の厚い刃物在使用使用され、削り掛けの加工とは異なる印象を受けた。何か別な目的をもった加工と判断される。

この遺跡でも、ユカンボシC15遺跡で擦文後期の層位から出土した資料（図46）と同様に彫刻のある資料（6673、近世アイヌ）が出土している（図52）。この資料の木取は板柂目で、樹種は「モクレン」で、報告者は「魚叩き棒あるいは皮なめし具」と推定している。

彫刻は比較的単純でイトクパと考えられている。また握りの末端近くに紐を掛けるための溝がみられる。使用痕は敲打部の中ほどに集中してみられ、ほぼ1周しており、使用頻度は高かったとみられる。このほか、この遺跡では叩き棒のミニチュアとみられる木製品や、破損した魚叩き棒のグリップエンドのような木製品も出土している。

4-5. 北見市常呂川河口遺跡出土の魚叩き棒

図53～図56 常呂川河口遺跡（北見市教育委員会、2008）はオホーツク海に注ぐ、常呂川の河口にある遺跡である。この遺跡では、近世アイヌ文

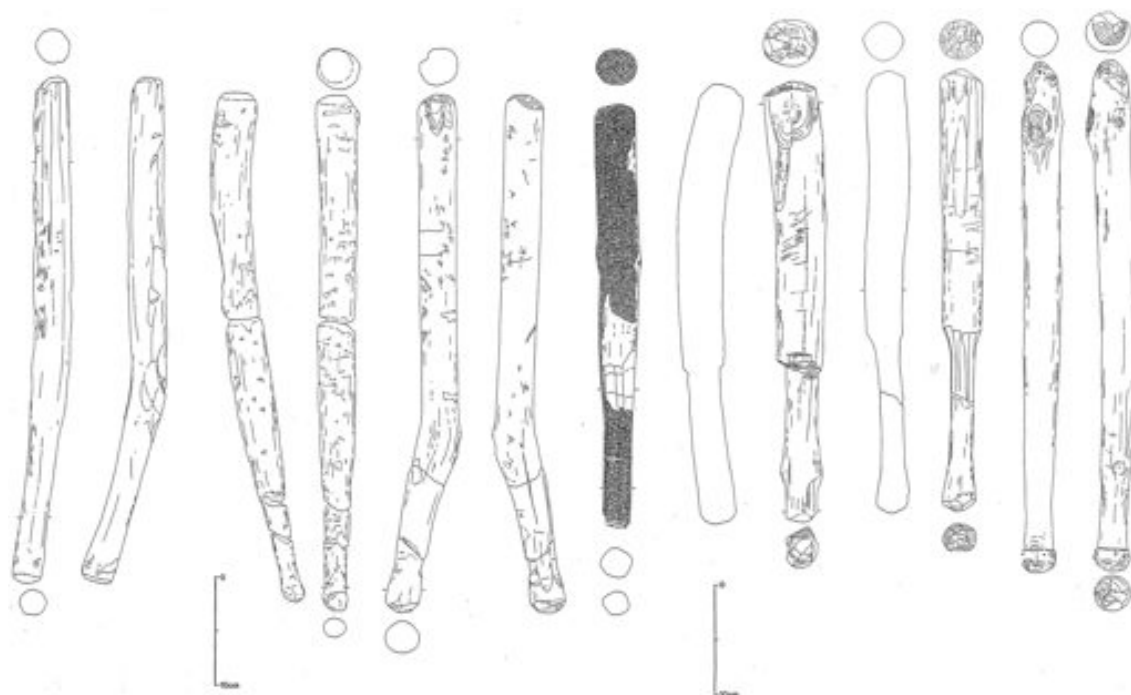


図53. 常呂川河口遺跡出土の魚叩き棒。左からBB44, BB44, Y35, Z35, T777, T654, T772。

化期（火山灰降下年代により1736年以前の近世）の魚叩き棒とされる木製品が7点、比較的狭い範囲から出土した。1点（Z38）は火を受けて炭化した資料である。保存処理が未了であり、出土した時点よりかなり劣化しており、十分な観察は行えなかった。

実測図でみる限り7点はいずれも両端部を鉤状のもので切断し、さらに刃物でこまかい面取りを施している（図53）。形態的にはT654、T777の



図54. ↑Y35 の削り掛けの位置.



図55. Y35 の削り掛けの痕跡. 幅約5mmの削り掛けの痕跡が観察される.



図56. 厚岸町海事記念館の魚叩き棒. バット状削り掛け付き（同館ホームページより転載）.

2点は柄の作りがしっかりしていて、敲打部との境界が明瞭で、横槌のような印象がある。敲打部に刃物傷や有機物の付着による黒ずみが観察され、打痕のようなものは認められない。魚叩き棒とすれば他の道具からの転用の可能性がある。

これに対して他の4点は両端が川水の流れや波によるローリングで摩滅しているが、枝または若木の幹を素材に、風化のため不明瞭ながらもグリップエンドがあり、「バット状」の魚叩き棒と考えられる。1点は直棒であるが3点（BB44、Y35）は「へ」の字状の曲がり木を素材にしている。BB44にはグリップエンドに斜めの刻線が認められシロシの痕跡と考えられる。もう1点（Y35）は敲打部にかなり明瞭な使用痕が認められる。さらにこの資料には柄部の敲打部と境に削り掛け（キケ）痕跡が確認される（図54、55）。

おそらく遺跡から出土した魚叩き棒とみられる資料で削り掛け（キケ）の痕跡が確認できたのは初めてであろう。博物館収蔵の資料の「バット状」の魚叩き棒にはほとんど削り掛け（キケ）が付く例はみられない。筆者が知る唯一の例は厚岸町海事記念館所蔵の魚叩き棒（図56）である。展示物で、担当学芸員の教示によると、同館が開館の際（昭和63（1988）年）に展示業者が作成したという。調査してもらったが、誰がどのような根拠でこのようなバット状で削り掛け付きの魚叩き棒が作成したかは不明だという。

5. まとめ

以上、調査の所見を述べてきたが、まとめとして次のような点があげられる。

石狩川河口近くの石狩浜に漂着していた棒状木製品は、北海道大学植物園10295などと類似しており、魚叩き棒だと考えられる。使用された場所は石狩川河口付近。使用年代は近世末から昭和30（1955）年までの間と推定される。誰が使用していたかについては石狩アイヌ・樺太アイヌ・和人の漁夫の可能性がある。ただ、棒の樹種はヤナギ属であり、樹種が意図的に選択されたとすれば和

人ではない可能性が強い。とすれば年代も安政5（1858）年から明治30（1897）年代までに限定される可能性がある。この地域では実際使用された魚叩き棒の実物は残っておらず、漂着した魚叩き棒の資料的価値は高く貴重である。

今回の調査では昭和30（1955）年ごろの石狩川河口の漁場で魚叩き棒が使用されていたことが明らかとなった。さらに昭和初期の絵葉書に魚叩き棒とみられる棒を持つ漁夫の姿が確認された。北海道では一部で今も魚叩き棒が使用されている。系譜的にはアイヌの魚叩き棒から取り入れられた可能性がある。博物館等のアイヌの魚叩き棒の調査では、「バット状」と「棒状」の2タイプがあることが再確認された。

遺跡出土の魚叩き棒の調査では、博物館収蔵資料にある「バット状」も含まれるが型式的に変化の幅が広く、さらに精査が必要である。また遺跡出土の資料の特徴は「数種類の樹種が使用される点」と「棒状」がみられない点である。

注目されるのは常呂川河口遺跡出土の資料に「バット状」で削り掛け（キケ）の痕跡が確認されたことで、「バット状」でキケ付きの魚叩き棒が初めて明らかとなった。

謝辞：資料の閲覧、撮影、調査にあたり以下の機関や個人にお世話になったので記して感謝の意を表する。

国立民族学博物館、国立研究開発法人水産研究・教育機構 北海道水産研究所、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園、北海道立北方民族博物館、北海道博物館、（広財）北海道埋蔵文化財センター、（一社）日本海さけ・ます増殖事業協会、（一社）胆振管内さけ・ます増殖事業協会、旭川市博物館、釧路市立博物館、士別市立博物館、名寄市北国博物館、苫小牧市美術博物館、函館市中央図書館、市立函館博物館、浦河町立郷土博物館、森町郷土資料室、新ひだか町博物館、厚岸町海事記念館、余市水産博物館、北見市ところ埋蔵文化財センター、紋別市立博物館、いしかり砂丘の風資料館。

安藤雅規、田岡克介、福田友之、氏江敏文、佐藤和利、武田修、種石悠（敬称略）。

石狩浜に漂着した魚叩き棒の保存処理・樹種同定につい

て（株）吉田生物研究所のご好意で研究支援を頂き、貴重な資料を後世に残すことができた。深く感謝申し上げます。

引用文献

- 赤松宗旦，1855. 利根川図誌（1994，岩波書店）。
- 秋葉鉄之，1957. 一口辞典 撲殺用の棍棒，魚と卵（さけ・ます資源管理センター技術情報），8(5)：9.
- 安斎忠雄，1987. 鮭叩き棒考. 民具研究，69：1-3.
- バチェラー，ジョン，1925. アイヌ人与其伝説. 富貴堂書房.
- 知里真志保，1944a. 樺太の生活 4 鱒漁. 知里真志保著作集第3巻，平凡社，174-188.
- 知里真志保，1944b. アイヌの鮭漁一幌別における調査. （北方文化研究報告14輯）知里真志保著作集3，平凡社，72-73.
- 知里真志保，1976. エゾウワミズザクラ *Prunus padus* L 註3. 知里真志保著作集別巻1 分類アイヌ語辞典植物編・動物編，平凡社，119-120.
- 藤井誠二，2008. 木製品：その分類基準と北海道における変遷の特徴. 北海道大学総合博物館研究報告，4：9-132.
- 北海道郷土資料研究会，1959. 快風丸蝦夷聞書 快風丸記事. 北海道郷土研究資料第5，25.
- 北海道埋蔵文化財センター，1996. 美沢川流域の遺跡群XVIII 調査報告書第102集.
- 北海道埋蔵文化財センター，1997. 美沢川流域の遺跡群XX 第1分冊 調査報告書第114集.
- 北海道埋蔵文化財センター，1998. 千歳市ユカンボシ C15遺跡（1）調査報告書第128集.
- 北海道埋蔵文化財センター，2000. 千歳市ユカンボシ C15遺跡（3）調査報告書第146集.
- 北海道埋蔵文化財センター，2001. 千歳市ユカンボシ C15遺跡（4）第二分冊，調査報告書第159集.
- 北海道埋蔵文化財センター，2002. 千歳市ユカンボシ C15遺跡（5）本文編 調査報告176集.
- 北海道先史学協会，1979. 江別太遺跡. 江別市教育委員会.
- 北海道ウタリ協会アイヌ史編集委員会編，1988. 民具等資料所蔵目録（1）. アイヌ史史料編2 北海道出版企画センター，23-1007.
- 犬塚幹士，2006. 最上川の鮭大網一大網の図に描かれ

- た漁撈を中心に－，最上川文化研究（東北芸術工科大学東北文化研究センター報告書），4：1-11.
- 石橋孝夫，2005. 北海道のサケ漁遺跡について．サケの考古学（いしかり砂丘の風資料館第2回特別展図録）．いしかり砂丘の風資料館，16-26.
- 石狩市教育委員会，2003. 2002年度低湿地の調査（2）石狩紅葉山49号遺跡低湿地部発掘調査概要報告．石狩市教育委員会．
- 石狩市教育委員会，2005. 低湿地部の発掘調査．石狩紅葉山49号遺跡発掘調査報告書 伏籠川総合治水対策特定河川事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 第1分冊 本文編．石狩市教育委員会，237-320.
- 河野広道，1934. アイヌのイナウシロシ（1）イナウの研究．人類学雑誌，49(1)：12-22.
- 北見市教育委員会，2008. 低湿地部出土の木製品．常呂川河口遺跡（8），北見市教育委員会，17-101.
- 大塚和義，1991. 民族誌としての内容分析．蝦夷風俗図式・蝦夷器具図式（元旦記）安達美術，37.
- 小野寺正人，1998. 東北地方の鮭叩き棒とアイヌのイサパキクニについて．東北民俗学研究，6：11-17.
- 佐々木利和，2004. アイヌ絵誌の研究．草風館．
- 佐藤三次郎，1973. 川漁の話－鮭．北海道幌別漁村生活誌，日本常民生活資料叢書第7巻，三一書房，162-163.
- 更科源蔵・更科光，1979. コタン生物記II. 法政大学出版局．
- 菅豊，1994. 呪具としての魚叩棒・呪術としての魚叩行為（アイヌ編）．動物考古学，3：21-39.
- 菅豊，1995a. 呪具としての魚叩棒・呪術としての魚叩行為－北米北西海岸ネイティブ編－．動物考古学，4：53-80.
- 菅豊，1995b. 呪具としての魚叩棒・呪術としての魚叩行為－日本本州編－．動物考古学，5：39-68.
- 高橋正勝，1981. 漁撈の道具－江別太遺跡出土を中心として．月刊文化財，218：19-25.
- 田中實，2002a. 石狩川口に於ける鮭網引きの光景 札幌維新堂絵ハガキ，石狩川鮭漁の実景．石狩漁業組合史，石狩漁業協同組合，口絵20.
- 田中實，2002b. 石狩アイヌと樺太アイヌの鮭漁場．石狩漁業組合史，石狩漁業協同組合，72-73.
- 谷元旦，1799a. 蝦夷風俗図式・蝦夷器具図式（大塚和義監修，1991），安達美術，37.
- 谷元旦，1799b. 蝦夷蓋開日記．（板坂曜子編，2002）
- 近世紀行文集成第一巻 蝦夷編，葦書房，166-293.
- 渡辺誠，1989. ヨコヅチをめぐって 考古学資料と民具．民具が語る日本文化，河出書房新社，158-180.